

# 【鋸の話】

山本秀雄

「屋久島の鋸」の話をもっと聞きたかった。それが我神散のキャラバン隊に参加して、北海道に渡った昭和五十二年の頃である。

札幌市にお住まいで、当時、恵命我神散の配置販売員をしておられた山崎さんとおっしゃる方が、北海道で「鋸の名匠」とうたわれた人物で、各地の秀れた鋸を集め所有しておられる中に、屋久島の「胴付」という鋸があるのとこのどだった。

現物を拝見する機会を得たのは昭和五十六年であるが、その年の九月二十三日、すでに八十歳近いご高齢だった御

夫人、山崎そのさんが一冊の本を送ってくださった。それが今回ご紹介する「鋸の話」——「歯科医道を求めて」の掲載誌、「日本之歯界第二二三号別冊」（昭和十六年東京市本郷区駒込吉祥寺町株式会社歯苑社刊）である。

執筆者は、当時の東京高等歯科医学校の巖 眞教先生。先生はなかなかの鋸の研究者であられた。

私は接する機会を得ませんでした。歯に関しては専門家が、鋸についても「歯は刃に通ずる」からと、鋸と対話するために全国を廻っておられたと山崎さんに伺ったことがありました。

## 歯科医道を求めて

巖 眞教

### 鋸の話 —— 町の歯科医療

去年も東高歯の入学試験は三月十日であった。今年とちがふのは雪が降った事だ。例によって此朝早く出勤したが、試験の順調に進

行するのを確かめると、採点開始までの三時間ばかりは暇になる。ゴムの長靴を履いて洋傘で雪を防ぎながら上野の不忍池をさして歩いた。採点前の準備運動を兼ねて、根津に住む鋸の名家を訪ねて来ようといふのが目的だった。途中で菓子折を用意して行き着いて見る

と、空家になってゐて引越先も不明だったので、消息を得るために近所の若い鋸屋の店に話込んだ。暫く話して居ると「どちらさんですか？」と聴かれる。近來、鋸屋さんの眼には私の知識と気合が漸く玄人に見えて来たのである。此日は会津の重兵衛、三条の武之介重光、それから播州三木産のものなど見せて貰ひ、下館の吉五郎一門の事を聞いた。採点開始の時刻もせまったから、弥生町に登り帝大の構内を正門に抜けて帰って来た。此雪降

りを一年後まではずきりと憶えてゐるのはこの行軍のお蔭である。

よつぽど道具嫌ひの家にも両刃鋸の一枚位は置いてある。新世帯では金槌、釘抜の次には鋸を買ふ。此際、一寸、鋸の説明をして置くのが順序であらう。木工用自動鋸は鋼板の一端に二十乃至三百程の歯をつけた工具で、日本式では縦挽と横挽と二様の刃がある。従つて縦挽用と横挽用との二種を一組として備へるのが理想的であるが、機械鋸による製材法が進出して来たので縦挽の用が少なくなり、鋼板の経済のために両刃鋸が通常となった。西洋式では茨目といふ縦横両用の刃のつけ方が行はれる。斜挽用として或は又家具用材などの堅木に対してまことに具合がよい。登山用の折畳式鋸などはこの茨目が用ひられる。斯う書いてくると、段々と鋸の解説に深入りして、薄くとも一冊の単行本が出来上る事になる。大工仲間では「一鉋二鋸」といふ。実際に鉋は初心者にとつての難物である。けれども私の体験によれば、神楽坂の夜店で最初に買った鉋の如きは台入寸六裏金附のものが大体四十銭也であるが、四円五円のものも併馳して今でも立派に役に立ってゐる。ところが鋸はさうは行かない。最初の頃の幾枚かは殆ど使はないうちに、柄を外して新聞紙に包んで長押しに挿して了つた。硬質の鋼板の要る時にブリキと同様に金切鋏で切つて使はうと

いふのだ。如何に新式の工作法によつても大凡一日の工賃と四十銭程の原料代とをかけたければ鋸は出来ない。判りやすく言へば、木工用両刃鋸は一挺四円以下では手に入らぬ。而して鋸の事が気にかかり始めた時に木工は漸く本道に乗るのである。

私の鋸が多少本当に切れ始めたのは比較的最近の事に属する。そして一番困つたのが目立ての問題である。東京及其付近に営業してゐる鋸屋の数は二千を下るまいと思ふ。私の家から数百歩の範囲内にも五、六軒はある。まことに鋸屋は軒を並べて繁盛してゐるといひ度い程である。それなのに鋸の歯を正しく磨り得る職人は少い。鋸身の狂ひを正しく除れる鋸屋は更に少い。こんな筈ではないがとあちこち探して歩いた。渋谷の有名な店へも持込んだ。八丁堀の大商店へも足を運んだ。白昼提灯をつけて「人」をさがし廻つた古人の様に……。しかしまだ私の鋸には刃がつかなかつた。鋸の歯は素人には手入が出来難い。私は実に困つた。困つた揚句が私の眼は恐ろしく肥えて来た。店先を歩いて通る間に其店でしてゐる仕事の程度が大体見当づけられる程鋭敏になつてしまつたのである。そして結局自分の鋸は自分で手入をやらなければならぬ、職人には頼めないとあきらめて来た。鉄砧と刃槌と鋸挟と鑄とは用意された。

あだかもよし、此頃、佐渡へ旅行の途中、越



後の三条市に立ち寄つて深沢伊之助氏を訪ふの機を得たのである。昭和十二年八月初旬、突然私の訪問を受けた伊之助氏は、職場の奥で毅然として鋸身の狂ひを直して居た。面談暫時、八寸と一尺との両刃を郵送して貰ふ様に頼んだ。さて私は東京に於る鋸屋の総評を述べ、伊之助を伊之助だけに使はせる目立師の推薦を乞うた。越後の鋸鍛冶は自分で目立迄はやらぬ。従つて鋸の切味は目立屋の技術によつて如何ともなる。帰京早々、教へられた通りに見たが、其結果を露骨に記す事を茲に差控へて置く。深沢氏一門の実力と名声とは明治大正昭和にわたり天下に鳴つて居る。私の故郷なる山陰地方へも伊之助の名は

通つてゐる。大阪、金沢、東京での深沢一門の名が圧倒的であるのは自身でたしかめた所である。此所で数行を割いて日常聞き慣れてゐる各地の名匠の名を二十許り挙げるべきであらうが、これ亦差控へておく。三条市の齒科医師O氏を介して他日再び伊之助氏に物を聴くの機を得る事になつてゐるが、此文も別刷を送るつもりであるから次の一点を附加して置かう。鋸は目立によつて齒もとが狂ふものである。更に又使用中如何に注意しても鋸身に狂ひを残す。完全な目立てと鋸身の手入れとを此の程度の鋸屋諸師に委せて置いたのでは、伊之助の鋸も其本来の効力の半分さへ現はさない事になる。商業上の都合は如何なるのか知らないが、少くも希望者には伊之助を伊之助だけに使はせる様に、手許に目立師を養成して置く事を深沢氏一門に希望する。鋸の郵送は至つて廉く簡便に出来るのだから。斯くして私の鋸はまだ切れる所まで到達して居なかつた。日本の鋸屋さん達よ！素人の私に店先に立たれて、私の鋸に本當の刃が立たないかと啖呵を切られて、仕方なしの冷笑だけでは困るではないか。全く私は斯う怒鳴りたい程苛々して来た。此の時、不図思ひだしたのが近所の老鋸師の事であつた。五本の改正道路から一寸引込んだ所に近年引越して来た老人である。私が世田谷に居た頃に一度店頭に立寄つて話した事があつたが、老

人に似合はぬ凜然たる仕事をして居た。私が製作品を手にとつて見てみると、「あなたはどちらさんですか？」と真面目になつて突込んで来た。此の「どちらさん？」をやられた恐らく最初であつたらう。まだそれ程の見識もなかつたのに、私は却つて恐縮して引下つて来たものである。思ひ出した私は、一脈の生氣をとり戻して此老人の所へ長岡の与三郎を一枚持込んで見た。やっぱり昭和十二年の八月中の事である。まだ此人は今日此頃程忙しくして居なかつた。出来上がった与三郎を私に返す時の言葉が畏ろしい。「どうもうまくないが、まあ使つて見なさい。また直してもよいから」といふのである。「はい、うまく出来ました。またいらつしやい！」とは言はないのである。持ち帰つて使つて見て驚いた。切れる！たしかに切れる！私は溜つて居た鋸と溜つてゐた不快とを、一緒くたにして此老人の店先へ持込んだ。そして初めて清々した夏の大氣を呼吸した。

気がついて見ると此人の仕事は金槌の打方にも、鑢の使ひ方にも一種の風格がある。此老人、唯の老人ではなかつた。慶応から明治にかけて活躍した福島県会津の鋸聖中屋助左衛門の孫弟子にあたる、同じく会津出身の巨匠、札幌の中屋助二の転居待期の姿であつた。

今ではだんだん鋸鍛冶と目立師とが分業になつて、東京付近は勿論、東海道方面、関西

の大部分も左様であらうが、一人で鍛造から目立て迄一貫して完全に行ひ得る職人は少い。中屋氏に聞くと東北、北海道方面へかけての鋸屋はまだ一般に両方が出来る様である。分業の利点は修業時間の短縮に在るが、魂のこもつた仕事は短縮修業と両立せぬ。他人事ではない。ここに多くの考へなければならぬ事が残つて来るわけである。ともかく鋸らしい鋸を仕上げるには一貫した精神の働きが根本になる。中屋助二氏、本名は竹名伝二郎、六十八歳。二十歳前に父なる初代助二氏を喪ひ、以来五十年、斯道に精進し來つた名匠である。

刃は齒に通じる。N夫人が町の齒科医療全般に向つて投げかけた不信任は、私が鋸屋一般に対して懐いた不満と相似たものではなからうか。私は鋸の齒に就ても遂に投げやる事はしなかつた。そして幸にも名匠に出逢ふ事が出来た。併し町の鋸齒はそれがためによくなつてはゐない。個人としての此老人は、既に生活の安定を得て少しもあせつてゐない。近來、益々多忙になつて依頼を拒絶するのに困つてゐる。私のもともとめてゐる理想に近い一つの型はたしかに斯の如き職業人である。

竹名氏の一人息子伝造君は、滿蘇國境に兵火のあがつた直後、応召して朝鮮に居る。同君は父祖の職を継ぐのをやめて勤め人になつた。助二氏が札幌を引きあげて目黒に越して

来たのは主として息子の就職の都合を考へての事であらう。此度は伝造君の武運長久を祈つて筆を擱かう。助二氏に就いて「名匠の言葉」として更めて筆を執る。

## 名匠の言葉——代用合金問題

鋸の名工中屋助二氏に就て述べるに際し、氏の近影と私の鳩小屋とを銅版にしようと思立つて教室員丸平君のカメラを借りて来たが、フィルムパックが品切れだと知つて大いにまごついた。眼鏡をかけず写真機を持たない私は近來黒の風呂敷をさげて歩くことによつて纔に日本人らしくしてゐる事になる。

話は約四十年の昔に還る。助二氏が二十歳ばかりで会津から札幌へ渡つた当時である。氏の腕前は已に日本の鋸匠の水準を越えてゐた証拠があるが、何しろ鋸聖と謳はれた中屋助佐衛門が晩年を送つた札幌の土地だ。仕事の暇なうち或日南五条を歩いて見てゐると、東二丁目に中屋松治郎といふ聞いた名の鋸屋がある。立寄つて名を名乗つて挨拶した。松治郎は福島の子、当時東北の鋸工として皆がした通り会津時代の助佐衛門に師事した事がある。初代助二の息子と知ると大いに喜んだ。若い助二氏が其店の様子を見廻すと、大形の山鋸ばかり眼につく。丁度其処へ大工

の棟梁が来て、九寸の胴付鋸を注文すると、松治郎頑として受付けない。それでは又機嫌の良い日に来るよと苦笑して棟梁は帰つて行った。胴付鋸といふのは厚さ0.2乃至0.4mm程、歯の数が一寸につき三十前後、片刃で背金のついた極薄の最もむづかしい鋸である。助佐衛門の流を掬む松治郎が、知合の棟梁からの注文を受付けないのを不思議に思つてゐると松治郎の語るところはかうだ。「札幌に来てから作つてやつた胴付は二十程もあらうか。それが時たまわしの眼につく。見る胴付も見る胴付もみんな無茶苦茶になつてしまつて居るではないか。胴付は鋸屋の精魂籠めて仕上げた品だ。わしの胴付の扱ひ方も知らない連中にいくら金をもらつたとて作つてやれるものか?! わしはこのあたりの連中にはこれが一番似合つてゐると思ふから山鋸だけ商つてゐるんだ。」

これは一昨年の暮、助二氏が会心の作八寸胴付を私に渡す夜、しみじみと語つた話だ。鋸は通常二枚を一組として鍛造する。薄い鋸は一枚では平らに鍛へ難い。「この八寸の兄弟になる一枚は私の仕事の記念のもりで幾年か前に家内の実家へ送つて置いたのです。これも大事に使つて下さい。」といふ。かう言はれて見ると何となく人情話めいて来て、昔から伝はる名刀妖刀の因縁話も一概に否定出来なくなるではないか。

「商売は商売だ。私は頼まれ、ば如何様にも鋸を作る。よい鋸をつくる。これ程の仕事をして其効能を知つて使つて呉れるだらうかと心細くなり乍らもなるべく精出して作る。松治郎の様に使ひ手が値打を知らないから作らぬといふのではない。相当の工賃を貰へばその工賃に應ずる以上の努力をして、なるべくよい鋸を作るのである。これは一つには私の値打を下げたくないからでもある。鋸屋は鋸屋だけのことがなければならぬ。私は私だけのことかなければならぬ。かうしてどうか今日迄鋸屋として立つて来た。迷はないでやつて来た。これでやつぱり日々が研究で……」かう語る老匠の仕事着の手許には、右と左と異つた綿メリヤスの袖口がのぞいてゐるが、私は自ら襟を正して相對せざるを得ない事になる。

研究といふ言葉が出たから一つ。東横線青山師範駅の附近に、刃物愛用家として有名なY氏邸がある。私も数年前から氏を訪ねたいと思つてゐるが、昨年の初夏の一日、助二氏が不意にY氏の事を私に尋ねた。一緒に木工具を見に行かないかといふのである。「鋸なら見に行つたつて仕方がないし、鋸の外のものはおあなたが見られる必要もないし」といふと「いや、さう考へてはいけない。この東京だから、或は良い鋸があるかも知れない、あつてよい筈ではないか。まあ見せて貰つてか

らでなければ批評は出来ない。研究は機会をのがしてはならないから」といふのである。茲でも私は思はず襟を正した。七十歳に垂んとする此の老匠が、しかも私の信じて疑はざる所によれば日本一の鋸匠なるこの老人が、鋸らしい鋸の不思議に稀なこの東京でこの上何の見学ぞ？ 越後の深沢一門の名声にも押されず、関西の宮野の自信にも頭を下げず、鋸聖助佐衛門の実力にも無条件には屈服しないこの頑老に、見ざるもの知らざるものに対する研究心尊敬心が何所に宿つて居たのか？ 私は後になつて再三これを解釈して見た。鋸に関する限り何人にも屈せぬこの此老匠の自信の故であらうか？ 絶対優秀なる鋸といふものを求める信仰心のためであらうか？ いやともかく見てからでなくては……といふ実証的な研究心からであらう。

そこで私達は一緒に出かける筈になつたが、実はまだ約束を果してゐない。老人は益々多忙になつて、私の方から誘ふのを控へてゐる仕末である。建具屋の職人も炭屋の小僧さんも植木屋の亭主も、何時しか此老人の所へ鋸を抱へて押しかけて来る。不思議によく鋸を切らす此老匠の存在は、斯うして此処目黒の一角に燦として職能の尊嚴を顯示する。

物の觀方の深淺は所謂學問には依らぬ。少くとも今日迄のところ左様である。これは一つには學問のさせ方と學問のし方が正当で

なかつたためでもある。此点は大いに氣をつけないければならない。もうかれこれ一年になるが、例のニッケル・クローム問題に私が頭を突込んだ時のことである。事は一方生理学、薬理学、化学の問題でもあるから、其方面の學者に相談して見たところ、幸に私の見当は間違つてゐなかつた。金属が菌用として人体に若くは人生に有害であるか否かを決定するのに、如何様な考へ方を執るべきかに就て、一流の學者の見解は皆一致してゐる。曰く、総合的に觀る事である。勿論、分析的方法是重要であり、根底になるものではあるが、一番大切なのは觀方の素直な事である。そして一番いけないのが下手に分析的な事である。と、かう一口に言つてしまへば誰にも分るが、それが専門家としての見識の高低、深淺、広狭に拘はることであるから、なかなか分り難いのである。此の事に就ては稿を更めて書くが、要するに、臨床的の事は臨床的に研究し判断して行かなければならないのである。若し今の學問の仕方が、斯様な重要な事を取違へる様な仕方であるのなら、恐るべき間違である。

ニッケル・クローム問題を中屋助二氏に持込んで鋸の方法で考へて貰ふと、「學者の研究してゐる事はあれはあれで正しい筈だが、実地家の見てゐる所もこれはこれで正しい。まあ世界が別なんだな。実地家の眼から見れ

ば、実地家と學者との意見が一致すれば一番結構だが、一致しないからとて実地が間違つてゐるわけではない。とかく學者の研究はそのまゝでは実地には合はぬ。早い所、學者にきいてわかる位の実地の事を、実地家が學者からきいて始めて氣がつく様でも困りものだから、自分のやつてゐる事は自分で正当に判断しなくては駄目だ。」とある。老人の語つてゐる所は、鉄鋼の研究と木工鋸の製造との關係に就ての経験に基いてゐる。そして鉄鋼研究の學者も亦この間の消息を十分知つてゐて指導してゐる。金鎚の一打が鋼鋸に興へる變形に就て、助二氏に従つて練習し考察し実験し結論すれば、自づと高等材料力学の程度に達する。此の程度に研ぎ澄ました物の觀方は、一通りの學問からは得難い。

要するに物の觀方の深淺は所謂學問には依らぬ。中屋助二氏の言葉は、殆ど其俚一流の醫學者の言葉である。私も亦自分の仕事を尊重し、開拓し、貫徹して行かねばならぬ。行ふ事、觀る事、考へる事。何よりも足取りを自分の天賦に合せて。といふ所で、追々と鋸の世界から自分の職能の方へ還りたいと思ふ。

## 名匠の言葉——巧拙の判断

「修正写真で受験」した卒業生があつて、

折角開けた歯科から医科への進路の障(しょうがい)碍にな  
りはしないかと懼(おそ)えられてゐる。

此の三月の初旬、本年度の首席F君が、卒業後、私の教室へ研究生として入りたいといつて来た。今のところ私の教室へ入ると、歯科医道の論議が理工学正面の研究の外に可(か)なり煩(わづ)ひになるであらう。それさへ承知なら其外の事、例へば何年無給で勤める余裕があるかといふ様な事は此際問題にすまい。一日でもよい、やつて来給へ。真剣に勉強し考へて行かう！ と話して置いた。斯う決めて、愈々卒業式も済んだ所へ、各医大のあの追加募集が発表された。F君も新潟医大を志望して目出度く合格した。

四月五日の正午頃であつたらう。F君が「明日入学式があるので今日出発します」と挨拶に来た。「一緒に行くのは何人か」と聞くと「四人」だと云ふ。歯界医界の注目的となる其等の人の自愛奮闘を祈つたのは云ふ迄もないが、「得てしてこんな時にふらふらと立ち上る連中の中には、歯医者で居ても医者になつても仕様のない人が居るものだ。ところでF君、君は歯科医界全部を背負つて行動して呉れねばならない。歯医者で立つか、医者で立つかは将来の都合で決るであらう。それはどっちになつてもよいが……」といふ様な激励の辞を述べた。「一緒に行く連中の中には、先づ困つた男が居るものと決めてゐ

ても差支へないな」とも云つた。断つて置くが、此時、F君の外に誰と誰が合格したか私は知らなかつたしF君からも聞かなかつた。但し、事が新聞に出る迄には私も事件の主要を聞いてしまった。そして私の予感の余りにも烈しく的中したのに自分乍(な)か驚いた。此のところ、F君は、私の予言に感服して然るべきである。

鋸の歯並みを睨み、鋸身の凹凸(おうとつ)をすかして見る名匠の薫陶(くんとう)は、流石(さすが)に其門弟にも一廉(ひとかど)の眼力を与へたと云つてよからう。事の真相は可成り詳しく新聞に報道されたから、あれが正しいのであらう。さういふ事の探索や記憶は最も不得意な小生であるが、恐らくあの場合は、一度は蹉(つまず)かねば覚醒出来ぬ一家であつたらう。試験とか競争とかいふ際(きわ)どい時にはあゝした極端な罪過が行はれ勝ちなものである。道を求めての執筆中、私は特に深く之を遺憾とする者である。唯、私の執筆の動機はそんな極端な過ちを避けようといふ消極的なものではなかつた。此の世智(せいち)辛い世の中に云はゞ逆行しても、積極的に、正しい道を切り拓いて行かうといふ毅然たるものであつた。受験写真の修正を諫(かん)止するよりも、共進会問題にかへつて来た方がよい。共進会問題とは斯うだ。

中屋助二氏の鋸を見て、一通りの褒め方をすると怒られる、「よく出来た、きれいに

来た」とほめると「鋸は見るものではない」と来る。見かけがきれいだといふ事は不思議に都会人の好む所らしい。助二氏の鋸程見かけのすつきりした鋸は、実の所、私は見た事がない。其癖、それを褒めると一通りは納得した顔付をするが、やがて間もなく「鋸は見るものではない……」の説明が始まる。見て分るものなら共進会で鋸の優劣が決る筈だと云ふ。助二氏は若い時に、共進会に自作の自信ある鋸を出品したが、あまりよい等級に審査された事がない。或時は、越後村上の中屋重太郎に学んだ流儀でもつて、玉鋼(たまがね)から鍛(きた)へた黒皮のまゝの天王寺鋸を大阪へ出品して、賞に洩(も)れた。心ある者がそれを譲(ゆず)りうけて喜んで持つて行つた程の上出来であつたが、審査員には鋸痕(つちあと)の難有(ありがた)味は分らなかつた。通常は鍛造してから銼(く)すいて更に磨きをかける所を、此鋸は鍛造だけによつて平均した厚みに美しく仕上げたもので、実に苦心の作であつた。因みにいふ、鎌や斧(おの)の類も、鋸痕の多く残つた品物は磨きのかゝつたものよりも大抵段違ひに良質である。助二氏の良いとする鋸が選に洩れ、或ひは比較的下位に審査される品評会の審査員達は、助二氏の弟忠兵衛氏の作に優等賞を与へる。審査員の実力はともかくとして、目で見て鋸の優劣を決めるのは正しいであらうか。木工用鋸は木を切る道具である。鋸は見る為(ため)に存在するものではない。

助二氏が常に説く「職能の効力」は、此事を心得た上で理解すべきである。少し大袈裟だが、鋸の優劣を比較する唯一至上の方法を伝えておかう。曰く「使つてみる」事である。歯を立て直し、鋸身の狂ひを直し、銹を落して手入をしながら使つてみる事である。最後まで使つてみる事である。至極単純にして明瞭である。その他に鋸の優劣を比較する方法はない。山と積まれた文献に頼る必要もない。硬度、弾性限、抗張力を測る必要もない。顕微鏡で見る必要もない。

私は茲に此明白な試験法を、わざわざ名匠の言葉を借りて来て説法しようと思ふ。「技能の効力」とは其技能の揮はれる目的に向つての効果を言ふのである。先輩竹花氏の義歯が、解剖のK先生から受けた講評は手きびしい。「此の義歯は口の外で咬合せて見るとまことによく咬合ふが、惜しい哉、私の口にはめて見ると噛めない。何とかならないものだらうか?」。私は氏から二度程此の話を聴いた。此の冬、補綴談話会のあとでのストーヴ会議に「仕事の良し悪しはどうして判断するか?」と試みに若い人達にきいて見た。「実用の経過を最後まで視る」と答へた人はなかつた。

学校の教育では形式の一通りを呑みこまず時間すらない。装着物の運命如何といふ最も肝要なところ迄、比較検討する余力も時間も

ない。けれども「技能の効力」「優劣の判断」に就ての基本的な筋道だけは、授けて置かなければならない。指導者が余程気をつけないと、補綴法の新考案が学会雑誌に掲載される頃には患者は他の補綴法の御厄介になり始めて居る。新考案は新考案だけの価値があり、創意を含む限り甚だ有益であるが、一番大事な事を見落した臨床報告は困る。そしてそれを見て感心してゐる臨床家があつたら、それこそ滑稽であり寧ろ悲惨ですらある。

話が少し鋸の事に深入りしすぎて恐入るがまあ一つ。会津時代の中屋助二氏の苦心談である。助二氏は語る。

鋸の地金に就て、私は色々考へて居る。それには鋸の目立を頼まれた時、断えず其刃先の金色と光沢とに注意する。切れなくなつて持込んで来る鋸の刃先を指で触れて見る。目立の鑢目が見えなくなり、裏刃も光沢よく光つて居るのは、切れが悪い。鑢目は消えても何となく肌目の荒いものは、割に切れが止らぬ。手許に木片を置いて、刃の疲れた鋸の切味をあれこれと試してゐるうちに、結論を得た。鋸の地金は肌目の荒いものがよい。同じ鋼なら焼入温度を高めて肌目を荒く仕上る方がよい。この推断を同職の者に話しても相手にせぬ。事実、上等の木工鋸を打つ人は十人が十人迄粒子のこまかい鋼を使ひ、折口もなるべく目のつんだのがよいとしてゐる。とこ

ろが、焼入温度を所謂適温にした肌目のこまかい鋸は、硬ければ鑢を弱らすし、焼戻しが過ぎると切味がぴたりと止まる。私は肌目を荒くして、鑢掛りもよく、硬さも十分で、しかも切味を出さすことに苦心する。粘りの減るのは鍛へ方で防ぐ。

これだけの事を実行し始めてから、私の鋸の切味はグンと増した。そして、製品の価格も一年程の間に二倍になつて飛ぶ様に売れ始めた。同業者は製鋼所の研究に指導されて居る位が上の部だが、鋸には鋸のやり方がある筈だ、と。私には今の所此の理論の是非はわからぬ。私が畏服する所は、此の著実な研究方法と、此の達眼と此の創意と、そして此の実証的態度である。自分のする事を自分の眼でみつめる意力こそ、此名匠から私達の学び得る最高の基準である。

顕微鏡に取附く若い学徒よ、試験機の前に立つ研究者よ、鉗子を握る技巧者よ、そして何よりも先づハンドピースとピンセットを執る臨床家諸師よ! 私達を指導し啓発する者は私達各自であらねばならぬ。設備、装置の不十分なるを嘆くなかれ、物事を素直に視て現象の背後に在るもの、意義をも見透す力を自分自身の裏に信じようではないか。

鋸を語る事、既に三ヶ月。斯うして続けてゐると何時迄も談義が長びく。ほんたうにそろそろ私の職能の方に還らねばならぬ。